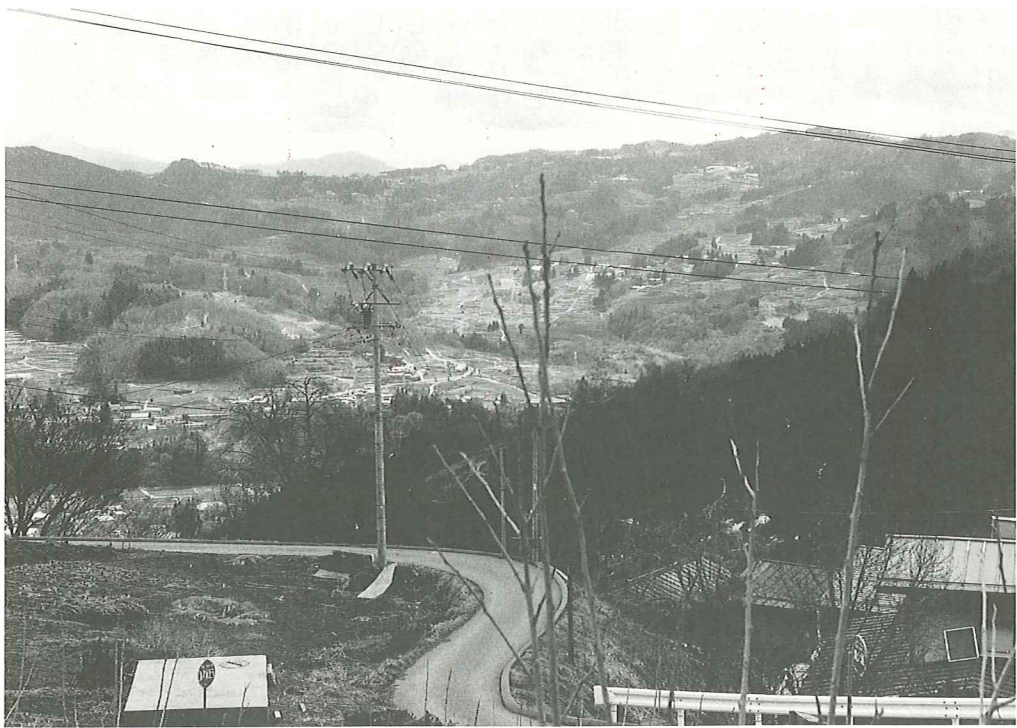


かたりべ 12

豊島区立郷土資料館だより



学童の歩いた道

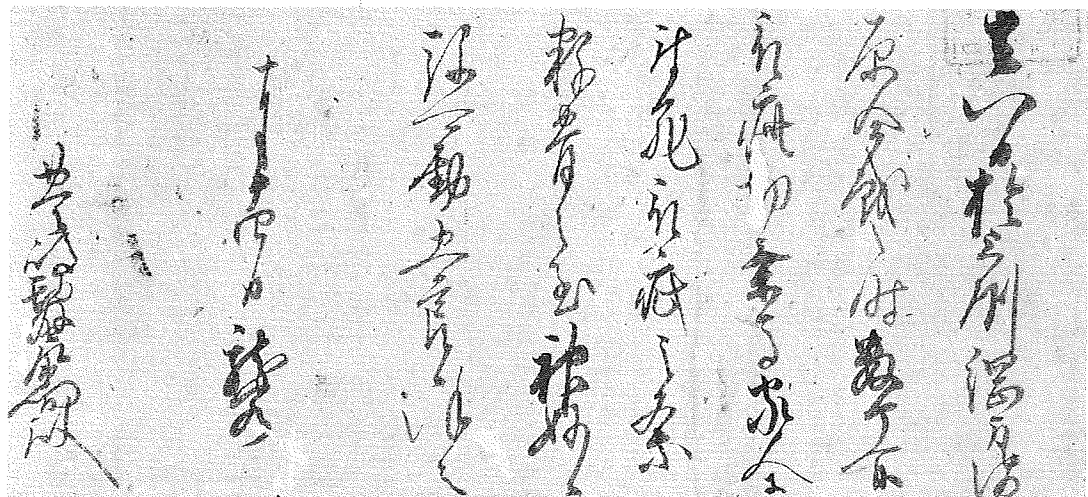
上の写真は、現在の長野県長野市七二会（旧七二会村）にある一本の山道です。七二会は、長野市の西部に位置する山あいの集落ですが、この集落のほぼ中心、標高約六二〇メートルの所にある七二会小学校（旧七二会国民学校）に、一九四五（昭和二〇）年四月から一月にかけて当時の区内高田第三国民学校の学童が渋温泉（現長野県山ノ内町）からの再疎開で来ていました。学寮には、この七二会小学校から標高で約二〇〇メートルほどふもとにある大安寺という寺があてられていました。

「七二会が近づくにつれて道はいよいよ上りになり、もうどこを見ても山ばかりだった。……四年以上の子供達だけで毎日峠を二つ越え、一里の道を本校まで往復する。」渡辺たかね氏著『赤い三角屋根の家』には、このようない節がありますが、写真の山道はまさに学童たちの歩いた「一里の道」なのです。険しい山道が再疎開での学童たちの厳しい生活を物語っているようです。

今度郷土資料館で中世の豊島一族についての古文書『豊島・宮城文書』を刊行することになり、その調査ということで、ふだんはめつたにお目にかかれぬ原文書にふれることができた。その中に、下の写真のような、とても不思議な文書を見つけた。

まず、この文書には差し出し人の花押がない。花押というのは、一種のサインで、自分の出した文書であることの証となるものだ。したがって、花押のない文書は、公的には通用しない（はずだ）。また、差出人の「龍若」という人物も不明だし、「十月十四日」という日付だけで何年に出された文書かもわからない。宛て先が「豊島勘解由左衛門尉殿」であることから、豊島氏に伝えられ、今日に残されたものであろうが、あまりに謎の多い文書で頭をひねった。

私事にわたるが、かつて『群馬県史』中世編の編纂にたずさわったことがあったため、本文中にある「去八日於上州綱取河原合戦」とは、一四六八（応仁二・享徳一七）年十月八日の毛呂島・綱取河原合戦（群馬県伊勢崎市）の事だとピンときた。豊島勘解由左衛門はこの戦争で自身が負傷するほどの大活躍をしたため、大将の龍若が「神妙の至り」とほめたたえたのがこの文書の内容なのだ（ちなみに、中世武士の戦功とは、このように何人やつけたかのみではなくて、どれだけダメージをうけたかが指標



右上にみえる割り印は、内閣文庫の所蔵印で、文書本来のものではありません

去八日於上州綱取河原合戦之時、数ヶ所被疵、切乘馬家人等討死被疵之条、粉骨之至神妙候、弥可励忠節候、謹言、

十月十四日 龍若

豊島勘解由左衛門尉殿

となっていた。東国版応仁の乱として有名な享徳の乱の一コマであった。大将の龍若とは、いったいどのような人物なのか。

手がかりは、紙の質だった。この料紙は、横簀目の筋のめだつ黄色味をおびた独特な薄手のものであり、『豊島・宮城文書』の中には、これと同質のものが他に三通あった。その全てが、関東管領上杉顕定の出した文書なのだ。この四通の文書の筆跡はともよく似ており、同じ右筆（執筆代理人）の手になるものと考えられた。龍若が、上杉顕定の元服以前の童名であることはほぼまちがいない。計算すると、まだ一四才の青年指揮官だったことになる。五十子陣（埼玉県本庄市）に腰をすえた龍若は、古河公方足利成氏を打倒するため、豊島氏以下の武蔵武士団に号令していたのである。

原文書を見ることによって、これらの謎がど

うやら解明できた。今度の『豊島・宮城文書』では、私のこの興奮を讀者と共有したかったので、全点カラー写真を入れ、原寸大(1)で花押の写真も収めた。是非是非御購入いただきたい。ところで、なぜ花押がないのかという最初の疑問について。花押とは、個人の人格の象徴であるから、元服していない半人前(はんにまへ)は責任能力がなかったたので花押を捺(お)せなかつたのではないか。童名の者の出した文書で花押のないものは多い。けれども花押をすえているものも多い。まだまだ中世は謎にみちあふれている。

学童疎開調査(長野県北部

・山形県)すすむ

昨年夏、学童疎開の特別展「さやうなら帝都勝つ日まで」を開催しましたが、これは疎開先の現地調査半ばで開いたものです。この時までに長野県中部・福島県について、現地調査を行い、それを踏まえて展示会を開催したわけですが、郷土資料館では、特別展終了後、現地調査を引き続き実施し、今年夏の第二回目の学童疎開展の準備をすすめています。ここで特別展終了後の現地調査の中間報告をしておきましょう。

昨年九月に長野県北部の第一回目の調査を実施しました。この時は須坂市・松代・山ノ内町・中野市・長野市北部などの学寮となった旅館・寺院と須坂小学校・山ノ内東小学校を訪問しました。こちらの方に疎開した学校は公立の池

袋第三・五・六、高田第一・二・三・四・五の

各国民学校と私立の川村学園です。この調査の結果従来の推定の誤りが分かりました。一つは高田第一国民学校は再疎開はしていないで、大部分の子どもたちが帰った一九四五年一月以降の残留者だけが中野市へいつていること、洪温泉に疎開した高田第五国民学校の子どもたちは、上林温泉に再疎開したことなどがわかりました。つまり安代温泉から洪温泉の西の方にかけての旅館が、再疎開していたわけです。二つには高田第二・三・四の各学校の再疎開先については、高田第三の記録中にある再疎開の計画どおりに行ったものと推定していましたが、実際はこの計画は変更されていたことが分かりました。これらはいままで東京で収集した資料だけから判断することの危険性と現地調査の必要性をあらためて痛感させられました。

所在を確認し、借用したり、借用予約をした資料には、子どもたちの食事の準備に使ったものが多く、具体的には鍋・釜・木鉢などがあります。また子どもたちがつかった箆(へら)もありません。これには引き出しの上に使用した子どもたちの名前がいまも残っています。学寮の看板もありました。また六年生が帰る時に旅館のおばあさんあてに書いた文集もありました。川村学園の子どもたちが疎開した角間温泉の旅館には作家の壺井栄さんが描いた疎開学童の絵がありました。これは子どもたちと同じ旅館に疎開していた作家の林芙美子さんを訪ねてきた壺井

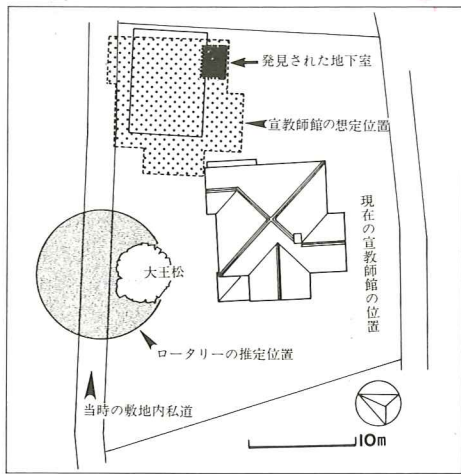
さんが描いたものです。

昨年一月には山形に調査に行きました。山形には長崎第一・二・三の国民学校と豊島師範の後身の第二師範の付属の子どもたちが疎開しました。この時は山形市・中山町・寒河江市・村山市・上山市の学寮となった寺院・旅館を訪問しました。その結果、学寮の看板・鍋以外にも、本立て・障子・火鉢・火鉢の側・洗濯干などがあるのが確認できました。また子どもが描いた絵、六年生が帰る時書いた寄せ書き、疎開学童の入浴の図などもありました。寄せ書きは当時の軍国主義教育の結果がよくでているもので、子どもたちが戦争参加の決意を述べたものです。中山町の旅館では食糧難がひどくトンボまで食べた話を聞きました。

今年三月には長野市・豊野町・三水村・飯山市の学寮となった寺院や教育委員会・学校の調査を実施しました。その結果、黒板・火鉢・学寮の看板などが残っていることがわかりました。また、当時、学童疎開に関係された方々から大変貴重な話をうかがうことができましたが、すでに関係された方も少なくなっており、今回の話は資料的にも重要なものです。

郷土資料館では、続けて山形市・中山町・寒河江市・東根市・上山市の教育委員会・学校や学寮となった寺院の調査を実施します。今後とも、情報・資料提供など一層の御協力をお願いします。

豊島区では、雑司が谷二丁目にある旧宣教師館を購入し、現在その整備を進めています。この旧宣教師館は、区内に残された最古の木造洋風建築物で、区登録文化財第一号になっています。また、外人宣教師が生活した建物としても残されている数少ない建物であり、豊島区としても、文化遺産の未来への継承という立場から大切に保護・保存していく考えを持っています。さて、この旧宣教師館は一八九二（明治二五）年に来日したアメリカ人宣教師マッケーレブ氏が、一九〇七（明治四〇）年に現在位置付近に建設し、その後、昭和五年に現在の位置に曳家したものです。建設当時の旧宣教師館敷地は約三九〇〇m²（約二二〇〇坪）の広さを持っていました。そして、敷地内に残されている樹木の中に



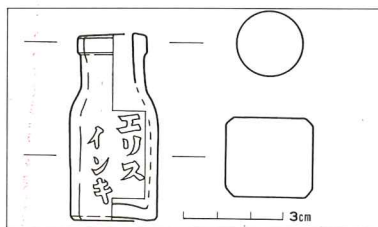
第1図 旧宣教師館

は、マッケーレブ氏がアメリカをはじめ、外国から持ってきたと考えられるものもいくつかあります。その一つに現在道際に立つ「大王松」の大木がありますが、この「大王松」は、当初は旧宣教師館前にあったロータリの中にあり、その時から動いていないといえます（第一図参照）。つまり、現在の道路は、実はマッケーレブ氏の生活していた当時の敷地内の私道だったのだでしょう。そして、このロータリーの正面に元々の宣教師館が建っていたということになります。

昨年三月、この敷地内の試掘調査を行いました。ここは雑司が谷地区が乗る台地の上でも安定した場所で、連載の中でも触れてきたように原始・古代の遺跡があってもおかしくないような位置にあつたため、調査対象に選んだのです。残念なことに、ねらっていた古い時代の遺構・遺物は発見されませんでした。かわりに、面白いものを見つけました。それは、明治時代以降に作られた地下室です（第二図参照）。この地下室は、現在の地表面から二m程垂直に掘り込んでおり、発掘区内でわかつた一辺の長さが三m以上を測る、かなり大規模なものでした。しかも、土を掘った中に木で枠を組み、壁は漆喰（しっくい）のようなものを塗っていました。このようなしっかりとした構造の地下室は、伝統的な日本家屋の施設としては考えられないものです。そうすると、この地下室の親建物は洋館で

あるという推測が成り立つことになります。ところが、現在の旧宣教師館にある地下室の位置を前提に、この地下室の場所に建物を動かしてみると、前に紹介したような形では建物がロータリーの正面には来なくなってしまう。果してここに、旧宣教師館とは違う洋館が建っていたのか、それとも従来考えていた建物の位置が間違っていたのか、今の所は謎という他はありません。この謎を解くには、地下室を完全に調査して、その構造と正確な時期を明らかにする必要があります。第二図は、地下室付近で出土したインクビンです。

現在では使われていないものですが、こうした遺物が地下室の時期を決定する上で重要な役割を果たすのですが、それはこれからの調査の中で課題ということになるでしょう。



第2図 出土したインクビン

かたりべ
 ・
 No.12
 ・
 1988年3月31日
 発行
 ・
 豊島区立郷土資料館
 ・
 豊島区西池袋2-37-4
 ・
 電話03-980-2351

